

# かたい大きな手

小川未明

青空文庫



遠く、いなから、出ていらした、おじいさんがめずらしいの  
 で、勇吉は、そのそばをはなれませんでした。おじいさんの着  
 物には、北の国の生活が、しみこんでいるように感じられまし  
 た。それは畑の枯れ草をぬくもらし、また町へつづく、さびしい  
 道を照らした、太陽のにおいであると思うと、かぎりなくなつ  
 かしかつたのです。

「こちらは、いつも、こんなにいいお天気なのか。」と、おじい  
 さんは、聞かれました。

「はい、このごろは、毎日こんなです。」と、おかあさんが、  
 答えました。

「あたたかなところで、くらす人は、うらやましい。」

おじいさんは、庭のかなたへ、はてしなくひろがる空を見ました。風のない、おだやかな日で、空がむらさきばんでいました。

「おかあさん、さつき、金魚売りがきた。」

「そうかい、戦争中は、金魚売りもこなかったね。」

「故郷は、まだこんなわけにはいかない。」と、おじいさんは、なにか考えていられました。

「もうすこし、近ければ、ときどきいらつしやれるんですが。」

「こちらへくると、もう、帰りたくなる。」と、おじいさん

は笑われました。

勇吉は、おじいさんの顔を見て、

「おじいさん、いなかと、こつちとどちらがいいの。」と、聞き  
ました。

「それは、こつちがいいさ。半日汽車はんいちしやに乗れば、こうも気候きこうが、  
ちがうものかとおどろくよ。」

「そんなら、おじいさん、こつちへ越こしていращい。」

「もうちつと、年としでも若わかければ。」

「お年としよりですから、なおのこと、そうしてくださればいいんで  
すが。」と、おかあさんがいいました。

「ねえ、おじいさん、そうなさいよ。」と、勇吉ゆうきちは、おじいさ  
んのからだにすがりつきました。

「まあ、よく考かんがえてみてから。」と、おじいさんは、しわのよつ

た、大きな手<sup>おお</sup>で、勇吉<sup>ゆうきち</sup>のいがぐり頭<sup>あたま</sup>を、くるくるとなでられま  
した。

「おじいさん、お湯<sup>ゆ</sup>へいらつしやいませんか。勇ちゃん<sup>ゆう</sup>、おとも  
をなさい。」と、このとき、おかあさんが、台<sup>だいどころ</sup>所<sup>ところ</sup>から、出<sup>で</sup>  
きて、いいました。

こう聞<sup>き</sup>くと、おじいさんも、その気<sup>き</sup>になられたのでしよう。

「そうしようか、どれ、はおりを<sup>だ</sup>出しておくれ。」

立<sup>た</sup>ちあがって、みなりをなめました。

「おはおりなんか、きていらつしやらないほうがいいですよ。」

「晩<sup>ばん</sup>がたになると、冷<sup>ひ</sup>えはしないか。」

「そうですか。」

やがて、おじいさんと、勇吉ゆうきちの二人ふたりは、家いえを出でました。おじ

いさんは、はおりをきて、白しろたびをはかれました。途中とちゆう、近きん

所よの人々ひとびとが、そのうしろすがたを見送みおくっていました。いなか

からの、お客きやくさんだろうと思おもつて、見るにちがいないと、勇吉ゆうきち

はなんとなく気きはずかしかったのです。

道みちの両りようがわに、家いえが建たっていました。それらの中なかには、店屋みせやが

まじっていました。そして、ところどころあるあき地ちは畑はたけとなつ

て、麦むぎや、ねぎが、青々あおあおとしげっていました。おじいさんは、

立ちどまって、それを見みながら、なにか感心かんしんしたように口くちの中なか

で、ひとりごとをしていました。それから、すこし歩あるくと、また

立たちどまって、たもとをいじっていました。勇吉ゆうきちには、あまり、

そのようすが、おかしかったので、

「どうしたの、なにか落としたんですか。」と、そばへいつて聞きました。

「湯銭をなくすと、たいへんだからな。」と、おじいさんは、いきました。

「なあんだ、そんなことなの。」

勇吉は、口まで出たことばをのみこんで、やはり、おじいさんは、いなかものだな、と思いました。

「おじいさん、お金を落としたって、入れてくれるよ。」

「なんで、湯銭なしに、はいれるものか。」

おじいさんは、まじめになって、いいました。

「わけをいえば、かしてくれるだろう。」

「ばかつ。」と、おじいさんは、きゆうにむずかしい顔かおをして、おこりました。なにも、しかられる理由りゆうは、ないと思おもったけれど、それきり、勇吉ゆうきちは、だまってしまいました。

二人は、西日ふたりにしびのさす、かわいて、白しろくなつた往來おうらいをいきました。ほどなく、あちらの水色みずいろの空そらへ、えんとつから、黒い煙くろけむりが、もくら、もくらと、のぼるのが見みえました。

「おじいさん、まだ、お湯屋ゆやは、あいていませんよ。」と、勇吉ゆうきちは、立たちどまりました。

「どうしてか。」

おじいさんもいっしょに立たちどまって、そちらを見みたが、とつ

ぜん、

「あれは、なにか。」と、さもびつくりしたような、顔<sup>かお</sup>をしました。道<sup>みち</sup>の上<sup>うへ</sup>に、手<sup>て</sup>ぬぐいをかぶった、ひげつらの男<sup>おとこ</sup>と、大<sup>おお</sup>きな洗<sup>せ</sup>面<sup>めん</sup>器<sup>き</sup>をかかえたものと、かたちんぼのげたをはいた子<sup>こ</sup>どもなど、ひとりとして、まんぞくのふうをしない、人<sup>ひと</sup>たちが集<sup>あつ</sup>まっていた。それはちようど、ルンペンどもが、通<sup>つう</sup>行<sup>こう</sup>人<sup>にん</sup>を待<sup>ま</sup>ちぶせしているようにも見<sup>み</sup>えるからです。おじいさんが、おどろくのも、むりはありませんでした。

「なんでもないんだよ。戸<sup>と</sup>のあくのを待<sup>ま</sup>っているのだ。」と、勇<sup>ゆう</sup>吉<sup>きち</sup>は、説<sup>せ</sup>明<sup>めい</sup>しました。しかし、おじいさんには、どうしても、のみこめませんでした。

「勇ぼうや、帰ろう。おまえは、あとでおかあさんといっしょに  
おいで。」

こういつて、おじいさんは、いまきた道をもどりかけました。  
勇吉も、しかたなく、その後からしたがいしました。

夜になると、家じゅうのものが、火鉢のまわりへよつて、たの  
しく話をしました。

「おじいさんが、こうして、いつも家にいられると、にぎやかで、  
いいんだがなあ。」と、おとうさんが、しみじみと、いわれまし  
た。

「ほんとうに、そうですよ。」と、おかあさんも、いいました。  
こう、みんなが、いつても、おじいさんは、そうするとは、い

わずに、ただ、笑<sup>わら</sup>っていられました。

その話<sup>はなし</sup>のきれたころ、おじいさんは、思<sup>おも</sup>いだしたように、さつき湯屋<sup>ゆや</sup>のまえに、ものすごい人<sup>ひと</sup>たちが立<sup>た</sup>つていた話<sup>はなし</sup>をなさると、みんなが、笑<sup>わら</sup>いだしました。

「そうでしょうな、はじめて、ごらんになつては。」と、おとうさんは、うなずきました。

「おじいさん、このごろは、風儀<sup>ふうぎ</sup>がわるくなりましたて、着物<sup>きもの</sup>や、げたや、せつけんまで、とられるので、だれも、いいふうなどして、お湯<sup>ゆ</sup>へいくものは、ございません。」と、おかあさんは、わけを話<sup>はなし</sup>しました。

「その話<sup>はなし</sup>を、勇<sup>ゆう</sup>ぼうからも聞<sup>き</sup>いたが、なにしろ、おどろいた。」

と、おじいさんも、大きな声で、笑われました。

「夏なつ時じ分ぶんは、自じ分ぶんの家いえから、はだかになつて、さるまた一つで、  
いく人ひとも、あります。」

「そんなに、気きをつかうのでは、湯ゆにも、らくらくはいれまいが  
。」

「そうなんです。それに、こみあいますし、まったく、湯ゆにいく  
のもらくではありません。おじいさん、いなかはどんなですか。」  
と、おとうさんが、聞ききました。

「いなかは、まだそんなでない。昔むかしとちがい、だいぶ暮くらしむき  
が、きゆうくつにはなつたが、湯ゆへいつて、着き物ものをぬすまれたと  
いうことは聞きかない。村むらでも、よくよく困こまつたものには、自じ分ぶんた

ちのものを、分けてやるぐらいの義理や、人情が残っている

からな。」と、おじいさんは、答えました。

子どもながら、勇吉は、この話に、感心しました。

「ねえ、おかあさん、おあしを忘れていつても、お湯に入れてくれますね。」と、勇吉が、口をだしました。

「さあ、このごろは、どうですか。」

「なんで、入れるものか。」と、おじいさんは、反対しました。

「それで、おじいさんは、お金を落としたら、たいへんと思つて、たもとをにぎつたり、おさえたりしたの。」

勇吉は、さっきのことを思うと、おかしかったのでした。お

じいさんが子どものようなまねをした、そのときのことかわかる

ように、

「は、は、は。」と、おとうさんまで笑わらいました。

「よく知しつた人ひとなら、入いれるかもしれませんけれど、お湯ゆなどへ、おあしを持もたずに、いく人ひとはありません。」と、おかあさんは、おじいさんの意見いけんに、賛さん成せいでした。

おじいさんは、なにか、ほかのことを考かんえていたとみえて、

「いなかかねに、じつとしていれば、心しん配ぱいなしだが、一ひと足あした旅たびへ出でれば、金かねよりたよになるものはない。万ばん事じが金かねの世よの中なかだけ、金かねのありがたみもわかるが、また、金かねがおそろしくもなる。金かねがなくても、安あん心しんして、暮くらせるみちはないかと思おもうよ。」と、おじいさんは、嘆たん息そくしました。

「まったく、おじいさんの、おつしやるとおりです。金<sup>かね</sup>が、あるために、貧乏<sup>びんぼう</sup>人をつくり、また、貧乏<sup>びんぼう</sup>が、人間<sup>にんげん</sup>を卑屈<sup>ひくつ</sup>にするのです。」と、おとうさんがいいました。

「お金<sup>かね</sup>なんか、世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>から、なくしてしまえばいいんだね。」と、勇吉<sup>ゆうきち</sup>がいました。

「まだ、おまえには、そんなことわかりません。だまつて、聞<sup>き</sup>いていらつしやい。」と、おかあさんは、勇吉<sup>ゆうきち</sup>をしかったです。「そうだ、馬<sup>うま</sup>も牛<sup>うし</sup>も、にわとりも、私<sup>わたし</sup>を待<sup>ま</sup>っている。早<sup>はや</sup>く帰<sup>かえ</sup>らなければ。」

こうおじいさんは、ひとりごとをしてから、話<sup>はなし</sup>は、またお金<sup>かね</sup>のことにもどりました。

「わしが、はじめで、東京へきたとき、夜おそく電車に乗ったことがある。雨の降る暗い晩で、その車には、あまり人が乗っていないかった。そのうち、車掌が、切符を切りにきて、ひとりおとこまえ人の男の前で、なにかあらあらしくいつていたが、その男を、途中で中からおろしてしまった。みすばらしいふうをして、かさも持つていなかったが、聞いてみると、一銭不足のためというのだつた。もつとも、あのころだけだ。」

ふけると、さすがに冷えて、おじいさんが、くしやみをなさつたので話を打ち切つて、みんなも、寝ることにしました。いつになく、おそくまで、起きていた、勇吉が、

「おじいさんは、やつぱり、いなかのほうが、いいんでしょう。」

というと、

「勇<sup>ゆう</sup>ぼうは、いなかへきて、おじいさんの家<sup>いえ</sup>の子<sup>こ</sup>にならんか。」  
と、しわのよった、かたい、大<sup>おお</sup>きな手<sup>て</sup>で、頭<sup>あたま</sup>をなでられました。  
勇<sup>ゆう</sup>吉<sup>きち</sup>は、かつて、知<sup>し</sup>らなかつた、あたたかな、強<sup>つよ</sup>い力<sup>ちから</sup>を感<sup>かん</sup>じ  
ました。それがいつまでも、頭<sup>あたま</sup>に残<sup>のこ</sup>つたのでした。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「銀河」

1948（昭和23）年7月

※表題は底本では、「かたい大《おお》きな手《て》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かたい大きな手

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>